

京城帝大英文科ネットワークをめぐって
—— 植民地期韓国文学における「英文学」と二重言語創作 ——

A Study on the Network of English Department of Keijo Imperial University
: "English Literature" and Bilingual Writing in the Colonial Period of Korea

佐野正人

1

植民地期の韓国文学において、言語という問題はきわめて鋭敏で本質的な要素をなす問題であったと言いうる。韓国語（朝鮮語）の問題は言うまでもなく植民地期を通じて、鋭敏な政治的問題を惹起したし、また同様に日本語という問題もまた植民地期を通じての文化的問題、政治的問題として一貫して存在してきた。例えば日本における近代日本語の問題が、国民的メディアとしての「国語」（標準語）の形成として記述されるとしたら、韓国における言語の問題は、国民的な言語メディアをめぐる朝鮮語と日本語との葛藤、抗争という様相を呈している。植民地朝鮮において「国語」という地位を日本語は占めたが、たえずそれに抗した朝鮮語正書法制定の試み、つまり近代的国民語としての朝鮮語形成の努力が続けられ、時に政治的問題化したのは改めて言うまでもないことだろう。いわば植民地権力に対する対抗的運動の焦点として言語の問題は存在していたのである。その意味で近代朝鮮における言語（「国語」）をめぐる抗争史はきわめて興味深いコロニアル／ポストコロニアルな問題領域を形成していると見ることができる。

文学の領域においても、言語の問題は多かれ少なかれ植民地期の近代文学者のほぼすべてにとって鋭敏な問題であった。近代文学の扉を開いたとされる李人植、李光洙らが共に日本留学経験を持っており、日本で近代文学に目を開き、日本語による初期創作を行ったことを取り上げても、そのことは十分に見て取れることだろう。植民地期のほぼ全体を通じて、近代文学者たちは多く日本留学経験を持ち、そのうちの少なくない部分が日本語創作を行っていることは、言語的な二重言語（Bilingual）という問題を提起している。二重言語的な創作は、植民地期の多くの作家、詩人に見られるものの、そのことの孕む問題性についてはいまだ十分な検討が行われてきたとは言い難い。最近になって、金允植によって『日帝末期韓国作家の日本語創作論』*¹ などによる二重言語の問題

*¹ 金允植『日帝末期韓国作家の日本語創作論』（ソウル大学校出版部、ソウル、2003）。またその他にも植民地期の二重言語文学を扱った著書には鄭百秀『韓国近代の植民地体験と二重言語文学』（アジア文化社、ソウル、2000）などがある。

化が進められてきているが、二重言語の持つ意味、その問題性についての十分な認識はこれからのことだと言っていいように思える。

本論では、そのような植民地期の朝鮮において二重言語の問題がどのような位相を持っていたかについて、特に1930年代の京城帝国大学英文科出身の文学者たちを中心的な対象として検討してみたい。例えば崔載瑞^{チュ・ジョン}、李孝石^{イ・ヒョソク}らの文学者や、彼らの師であった佐藤清といった英文学者のことである。なぜ彼らを取り上げるかについて一言しておけば、1926年の京城帝大本科の開校によって、近代韓国の知的状況、文化的状況は一定の変化がもたらされたと見られるからである。それまで日本留学経験者によって占められていた韓国文学のシーンの中に、曲がりなりにも韓国国内での高等教育機関が成立したことで、1930年代の文化的状況は変化を見せ始めているように思える。前述したような二重言語の問題についても、また新たな状況が生まれてきているように思えるからである。萌芽的なものであったかもしれないが、1930年代の朝鮮には一種の言語的、文学的主体化の志向が見え始めているように思える。脆弱なものであったかもしれないが、また1940年代にはその萌芽すら日本の戦時体制の中で挫折、変質を余儀なくさせられていくのだが、1930年代の文学と学問的状況の中には、一定の植民地的主体化の契機が読みとれるように思えるのである。それは前もって言うっておけば一定のポストコロニアルな傾向を示すものであり、ポストコロニアルな問題領域を示すものであったと考えられる。以下、本論では1930年代のそのようなポストコロニアルな文化状況について素描してみたい。

2

京城帝国大学*2 予科が清涼里に開校したのは1924年のことであり、2年後の1926年には東崇洞に本科（法文学部、医学部）が開校している。李忠宇『京城帝国大学』によれば、発足当時は23講座であったのが、翌年には49講座に大幅に増えている。文学関係としては国語学国文学講座（2講座）、朝鮮語学朝鮮文学講座（2講座）、支那語学支那文学講座（1講座）、外国語学外国文学講座（2講座）が置かれていた。そのうち、外国語学外国文学講座は実質的に英語学・英文学講座であったと言う。

佐藤清*3の「京城帝大文科伝統と学風」によれば、英文科のスタッフとしては佐藤清（英文学）の他にL.Haworth（英語学）、寺井邦男（英語学及び英国小説）、中島文雄（英語学）の4名であり、英語学のウェイトが重かったようである。

*2 京城帝国大学に関しては、日本、韓国の双方でさまざまな研究が積み重ねられてきている。主なものを挙げておけば、李忠雨『京城帝国大学』（多楽園、ソウル、1980）、イ・マング『朝鮮教育史』（コラム、ソウル、1988）、鄭在哲『日帝の対韓国植民地教育政策史』（一志社、ソウル、1985）、丁仙伊『京城帝国大学研究』（文音社、ソウル、2002）などが韓国側から出ており、また日本側からは泉靖一「旧植民地大学考」（『中央公論』1970年7月号）、阿倍洋「日本統治下朝鮮の高等教育——京城帝国大学と民立大学設立運動をめぐって——」（『思想』1971年7月号）、馬越徹『韓国近代大学の成立と展開——大学モデルの伝播研究——』（名古屋大学出版会、1995）、稲葉継雄『旧韓国～朝鮮の「内地人」教育』（九州大学出版会、2005）、また岩波講座『「帝国」日本の学知』（岩波書店、2006）所収の諸論文、特に石川建治「コスモス——京城学派公法学の光芒——」などがある。

当時の「外地」に新設された高等教育機関——京城帝国大学の他に台北帝国大学がある——にはかなり重点的に予算が配分されたらしく、研究環境は相当に恵まれていたことは多くの証言がある。佐藤清の上の文章にも、「英文学研究室は、当時としては最もめぐまれた予算を与えられ、『英文学研究』誌に毎号発表された新刊書の大部分はいつも補給され、組織的に整備され、……」というように述べられている。助手によって、英文学関係の著者に関するあらゆるデータを丹念に集成したカタログ10数冊が作られたことも述べられており、新設講座にふさわしい清新な意欲に満ちていたことが窺われる。学生の発表機関としては、『京城帝大英文学会報』が刊行されていた。

英文学講座に朝鮮人の優秀な学生が集まってきたことについては、佐藤清の文章に証言がある。

京城帝大には、きわめて厳しく選ばれた少数の入学で成立した予科があり、従って 文学部へ来る学生は少数であっても英文科へ集まる学生は一番多い方で、秀才も少なくはなかった。殊に、朝鮮人学生の優秀なものが集まったのは、帝大の名にあこがれたというよりも、外国文学への彼らの渴をいやしてくれるものが帝大の中にあつたからで、二十年も朝鮮学生と親しく交わっている間に、いかに彼らが民族の解放と自由とを外国文学の研究に見出さんとしていたかを知って撃たれざるをえなかったのである。^{*4}

この「京城帝大文科伝統と学風」という文章は帰国後十数年も経ってからの回想であり、その点は若干割り引いて考えねばならないが、しかし佐藤清の学問的姿勢から見て、上の回想はほぼ事実
に即していたと考えてよいだろう。この文章から窺われるのは、朝鮮の学生にとっての「英文学」の持っていた特別な意味についてである。佐藤清はそれを「外国文学への渴」とも呼び、また「民族の解放と自由」をそこに求めようとしていたとも述べているが、そこには「英文学」が植民地期の朝鮮において持っていた特別な位相が象徴されていると見ることができる。この「英文学」の持った意味に関しては、後に改めて取り上げてみることにしたい。

実際に京城帝大英文科に多くの優秀な朝鮮人学生が集まったことは、その後の朝鮮文壇における英文科出身者の活躍を見ることで知ることができる。第2期生（1930年卒業）として李孝石^{イ・ヒョソク}がおり、第3期生には崔載瑞^{チェ・ジェソ}、第4期生には趙容萬^{チョ・ヨンマン}といったその後の朝鮮文学を支える面々が輩出されているのを見ることができるからである。特に崔載瑞は京城帝大英文科の1930年代朝鮮文学

^{*3} 佐藤清（1885～1960）は仙台市出身の英文学者、詩人。第二高等学校、東京帝国大学英文科を卒業し、神戸関西学院（現在の関西学院大学）、東京女子高等師範学校での教職を経て、1926年に京城帝国大学が開設されるのに合わせて英文科教授として赴任、以来終戦の年まで約20年間を京城の地で暮らし多くの日本人・朝鮮人の弟子を育てた。その一方、詩人としても活動し『西灘より』（自家出版、1914）、『愛と音楽』（自家出版、1919）、『海の詩集』（自家出版、1923）、『雲に鳥』（自家出版、1929）、『折蘆集』（作品社、1938）、『碧霊集』（人文社、1942）などの詩集を出している。朝鮮生活を素材とした詩も数多い。英文学関係の著書としては、『愛蘭文学研究』（研究社、1922）、『キーツの芸術』（研究社、1924）、『英詩の精髓』（研究社、1930）、『文学汎論』（四条書房、1931）、『ワーズワース』（研究社、1934）、『T.S.エリオットの詩研究』（研究社、1937）、『シェリー』（世界評論社、1949）、『キーツ研究』（英語研究社、1949）などがある。

^{*4} 佐藤清「京城帝大文科伝統と学風」（『英語青年』、1959）

における位相を知る上でたいへん興味深いケースを提供してくれる。彼は1931年に卒業論文「The Development of Shelley's Poetic Mind」を書いて卒業した後、同大学院で修士課程を終え（研究題目は”Romantic Types of the Poetic Mind”）、1934年に同大学出身者として始めて英文科講師となっている。朝鮮人学生が絶対的に少数だった京城帝大の雰囲気から推してみる時、崔載瑞の講師就任は異例のケースであり、指導教授だった佐藤清らの強い推薦があったことが推測される。その期待に添うように彼のその後の活動も京城帝大英文科の人的ネットワークを強く意識し、そのネットワークの中で活動したと見ることができる。

京城帝大英文科の講師就任に前後して、崔載瑞は日本の英文学会および論壇に華々しくデビューし、「T.E.ヒュームの批評的思想」（『思想』、1934.12）、「John Dennis の詩論研究」（『英文学研究』、1935.1）、「現代批評における個性の問題」（『英文学研究』、1936.4）などの文章を発表している。総合誌『改造』にも1936年3月に「英国評壇の動向」、1937年2月に「ハックスリーの風刺小説」などの評論を発表している。言うまでもなく『改造』誌は当時の総合誌として権威のあった雑誌であり、そこでの発表ということは日本の評論界において崔載瑞が新進の評論家、学者として待遇を受けたことを表している。もちろんそこにも恩師である佐藤清の推挽があったことは容易に推測できるものであり、朝鮮と日本とを跨いだアカデミズムとメディアとの強いネットワークがそこに生成していることを読みとることができる。別の言い方をしてみれば、1930年代において京城帝大（および台北帝大）という植民地高等教育機関が一つの知的ネットワークの結節点として、あるいは生産点として登場しつつあり、そのことは日本と朝鮮とのアカデミズムや、文学、評論、また文化といった多くの分野における地殻変動をもたらしたものと言うことができるのである。1930年代において朝鮮、台湾、日本をまたいだ知的ネットワークが形成されており、その中で朝鮮と日本とをまたいだ活躍をする作家、文化人が登場している（作家として張赫宙^{チャン・ヒョクチュ}、舞踊家として崔承熙^{チュ・スンヒ}などを挙げることができる）。この知的、文化的ネットワークの形成において、京城帝大という教育機関はきわめて大きな役割を果たしたのであるし、英文科における佐藤清、崔載瑞、李孝石らの活動と言うこともそのような東アジアの知的、文化的ネットワークの中においてその位相を考えることが必要であると言いうるのである。

崔載瑞のその後の活動も、そのような東アジアをまたいだ知的、文化的ネットワークの中で行われたものであったと見ることができる。張赫宙のように日本へ本格的に移住し、日本語創作を行うことはなかったとは言え、崔載瑞もまた朝鮮と日本という二重のアイデンティティの中で苦悩し、主体化の道を模索しているのを見ることができる。1939年には『人文評論』誌を主宰し、1941年には雑誌統合によって『人文評論』が閉刊されると、『国民文学』を崔載瑞は編集・発行することになる。事実上、『国民文学』は日本語雑誌であり、日本語創作をめぐる崔載瑞が苦悩したことは編集後記などによって知られるし、またそこには「朝鮮文学」と「日本文学」との間に立って彼が苦悩した姿も描かれているのである。本稿では1940年代の『国民文学』の時期まで扱う

ことはしないが、1930年代に形成された東アジアの知的、文化的ネットワークが戦争期を迎えて、苦悩しながら変質していく過程として1940年代の『国民文学』を初めとした文学状況は捉えることができる。この問題については別稿を準備したいと考えている。

3

崔載瑞^{チュ・ジェソ}が二重言語創作について、あるいは日本語創作についての言及をしているのは、ほぼ戦争期の『国民文学』誌上と、1943年に刊行された評論集『転換期の朝鮮文学』（日本語評論集）においてである。したがって厳密な意味で、1930年代の崔載瑞らの言語意識や文学意識を取り出すことは難しいのだが、ここでは間接的な方法によって1930年代の京城帝大英文科出身者たちの言語意識や文学意識を取り上げて見てみたい。

崔載瑞が、自らの幼少期、青年期の言語環境について触れた文章が、『転換期の朝鮮文学』の「まへがき」に見られる。そこには次のように語られている。

私は子供の時から日本のことばと、部屋と、その礼儀正しさと、飽くまで澁淵たる学問的好奇心と特に明治文学とが好きであった。そして私が知り合つた幾人かの内地人とは、何の隔りもなく付き合ふことが出来た。かうして私は日本を呼吸し、日本の中に育つて来た。然しそれらのことを一々意識的に日本国家と結び付けて考へるやうなことはしなかつた。要するにそれは趣味の問題であり、教養の問題だつたからである。^{*5}

ここで率直に語られているのは、1908年生まれの崔載瑞にとって、日本語環境が特別に努力して得られる種類のものではなく、むしろ個人の「趣味」や「教養」として自然に経験されるものであったという述懐であった。崔載瑞らの世代にとって、ということは1920年代後半から1930年代にかけて自我形成を行った世代にとって、日本語とは選択の問題や抵抗の問題であるよりも、すでにそこにある所与の条件であったと言っても過言ではないかもしれない。特に日本語に限らず、上の崔載瑞の文章に言及されているのが、「部屋」や「礼儀正しさ」、「学問的好奇心」といった外面的、内面的な生活スタイル全般にかけてのものだったことに窺われるように、それら生活スタイルと結びついた「日本語」とは、生活化され日常化され、個人の内面にまで浸透したものとして存在していたとすることができる。もちろん解放後の視点からすれば、このような言語意識は批判されるべきだろうが、1930年代の言語状況、文学状況を抑えておく上でそのことは客観的に認識されなければならない条件であったと考えられる。

ちなみに同世代（1905年生まれ）の張赫宙^{チャン・ヒョクチュ}の場合も、日本語創作について同様の回想を行っ

*5 崔載瑞『転換期の朝鮮文学』（1943、人文社、日本語評論集）

ている。

私は日本文で文章を書くのに、何等の不思議がある筈はない。私は日本語で物を考へ、空想をする。これは、私にとっては、自然であつて、それを誇りとしなければ、母国語を軽んずると、恥ぢもしない。私が何時頃から、このやうに日本語化したかは、インテリ朝鮮人が大抵さうであるやうに、八九歳の頃初等学校に入学した時からのことではあらうが、… (後略)*1

張赫宙や崔載瑞らの世代が本格的に自我形成を行い、文壇に進出するのがほぼ一九三〇年代初頭のことであり、そこで朝鮮文学にとっては言語意識、文学意識に関して大きな転換が行われたものと見ることができる。いわば二重言語世代とも言うような、日本語創作をほぼ「自然」に行う世代の登場であった。それは崔載瑞も張赫宙も証言しているように、意識的な選択の問題であるよりは、「趣味」や「教養」の問題に属することであり、「誇り」や「恥」といった価値判断からも距離を置いたものであった。それは準母語として日本語を操りうる世代の登場でもあり、そのことによって一九三〇年代の東アジアの文学状況は大きく転換していくのである。繰り返せば、そのような世代的経験により確固とした枠組みを提供したのが、京城帝大の設立とその卒業生の輩出ということであり、京城帝大（および台北帝大）の東アジアの文学的、文化的ネットワークにおける結节点的な位置はその二重言語世代の登場とちょうど重なって際だったものとなったと言っているのである。

京城帝大での教育は必ずしもそのような二重言語的な条件に対応していたというわけではないが、しかしおそらくそのような二重言語的な条件にある程度対応する形で例えば英文科での教育は行われていたと見ることができる。佐藤清の回想から引用すると、

私は大学の外国文学というものは、美術学校や音楽学校のようなところがなければならぬと思っております、文学的な創作や批評の方面に働く人々のためにも準備をしなければならぬと考えております、いつもそういう心構えをもってやってきたのであります。外国文学のための外国文学ではなく、自国文学のための外国文学という考えでやってきたのであります。(中略)

英文学そのものの取り扱い方につきましては、……いつも日本文学、東洋文学と比較しつつ、また比較することによって、自己を批評し反省することが出来るように、つとめたのであります。*7

このような佐藤清の学風は、新設の帝国大学として他の学究的な内地の帝国大学の学風との対比を念頭に置いたものと言うこともできるが、やはり一方では植民地朝鮮の具体的な条件に即応する

*6 張赫宙「我が抱負」(『文芸』、1934年4月号)

*7 佐藤清「京城帝大文科伝統と学風」(『英語青年』、1959)

形で主張されたと見た方がよいように思われる。上の文章で強調されているのは、一つには実践的な創作や批評の方面でもそれなりの準備ができるようにということであり、実際にそれは自身の詩作や卒業生たちの文壇進出ということで実現されている。また、もう一つには「自国文学のため」の外国文学研究という立場を堅持したことであり、実践的に自国文学を「批評し反省する」ことに役立つものとして捉えている点である。もちろん一義的には自国文学とは日本の文学を念頭に置いてのものだったとすることができるが、しかしそこには朝鮮文学の主体化のために開かれたものであったという性格も見逃せないように思われる。先に引用した部分でも言われていたように、「二十年も朝鮮学生と親しく交わっている間に、いかに彼らが民衆の解放と自由とを外国文学の研究に見出さんとしていたかを知って撃たれざるをえなかったのである」というように、そこには少なくとも朝鮮の主体化のための外国文学研究という立場は意識されていたと見られるからである。もちろん特に現在の視点から見ると様々な限界があったことは言うるが、当時の世代的な条件、二重言語的な条件に対応し、朝鮮／日本という言語的制約を超えたところでの主体化を試みた点は、きわめて一九三〇年代的な東アジアの状況をよく反映し、それを主導していったものと考えることができる。

繰り返せば、崔載瑞らの二重言語的な言語意識、生活意識と、佐藤清の朝鮮にも開かれた主体化、実践化のための学風とは、相互に媒介し、媒介されながら一九三〇年代朝鮮の文化的状況を切り開いていくのである。

4

ところで、改めて植民地期の朝鮮において「英文学」の持った意味について立ち返って考えてみたい。先にも触れたが、なぜ京城帝大英文科という場（トポス）に多くの若き朝鮮の文学者たちが集まり、一九三〇年代の知的、文学的ネットワークの中で一つの結節点となりえたかという問いに答えるためでもある。

もう一度、佐藤清の「英文学」について触れた文章を引いておこう。

京城帝大には、きわめて厳しく選ばれた少数の入学で成立した予科があり、従って文学部へ来る学生は少数であっても英文科へ集まる学生は一番多い方で、秀才も少なくはなかった。殊に、朝鮮人学生の優秀なものが集まったのは、帝大の名にあこがれたというよりも、外国文学への彼らの渴をいやしてくれるものが帝大の中にあつたからで、二十年も朝鮮学生と親しく交わっている間に、いかに彼らが民族の解放と自由とを外国文学の研究に見出さんとしていたかを知って撃たれざるをえなかったのである。^{*8}

*8 佐藤清「京城帝大文科伝統と学風」(『英語青年』、1959)

ここで植民地期の朝鮮における「英文学」の持つ特別な位相について、佐藤清が言及していることについては、先にも触れて置いた。「外国文学への渇」とも呼ばれ、また「民族の解放と自由」をそこに求めたとも述べられているが、これが十数年後の回想であることを割り引いてもそこには植民地朝鮮における「英文学」の持つ意味について佐藤が経験したところの実感が反映されていたと見ることができる。

それは一言で言えば、朝鮮という民族的なアイデンティティを模索するための学問的、知的参照項としての役割であったと言えることができるだろう。ただ単に先進的な学問への憧れと言うことを越えて、自らの民族的アイデンティティの確立に関わる必須の参照項として「英文学」が機能したのではないかという印象を禁じられない。もう少し立ち入って言えば、植民地、民族的抑圧、母語と支配者の言語との二重言語、文化的・言語的な民族的アイデンティティ、自由と解放、といった植民地期の朝鮮の知識人にとって考えざるをえなかった事項について、内在的な参照項を与えてくれるものとして機能したのではないかということである。

もちろん、1920年代、30年代の状況において、それらの事項を一義的に参照しうる理論的な参照項としてはマルクス主義があったし、多くの朝鮮人学生がマルクス主義に惹かれたのも事実である。しかし、より朝鮮の経験に即した内在的な参照項としての役割を「英文学」が果たしたことについて、ここで見ておきたいのである。

例えば、前章で触れたような二重のアイデンティティ、二重の言語ということについて、理論的にはマルクス主義では扱えないような事項が、「英文学」においては参照項として存在していたし、それは特に1920年代においてはアイルランド文学の文芸復興という形で脚光を浴びていたテーマでもあった。また、アイルランドでは1922年に長い独立運動の結果として自治国（アイルランド自由国）が成立し、実践的な植民地からの解放、あるいは自治という問題が現在の的に試されている場（トポス）でもあったのである。

そのような「英文学」という学問的な場（トポス）に多くの若き朝鮮人学生たちが自らの内在的な問題を見出そうとしたことは想像に難くない。実際に彼らは、事あるごとに「英文学」の中に参照項を見出そうとしているのが見られるのである。

往年、己未年に朝鮮の民族的運動がひときわ熾烈だった時に、日本の——在野の政治家によって朝鮮の自治問題を云々するようになったのは、彼ら統治者たちの心に常に朝鮮に関してアイルランドを対比していたためであり、同じ時期から今日まで朝鮮人の中でもあるいは妥協的運動、あるいは画策をするものがあったのは、これら朝鮮人としての心の中に常に朝鮮とアイルランドを対比する者たちであった。ともかく、朝鮮問題とアイルランド問題は、互いに連想され対比される問題である。^{*9}

*9 「アイルランド問題と朝鮮問題」(『朝鮮日報』、1926.11.14)

アイルランド人が英語で新しいアイルランド文学を興し、英文学を圧倒したようになることを願うものであり、諸君もそのような覚悟があることだ。多くの民族運動の先駆者は文芸運動であった。新朝鮮を起す先駆も新しい朝鮮文学でなければならない。(2行削除) そのような意味の下で、朝鮮で新しい文学が興り眠れる日本文学に刺激を与える世代が出ることは、私だけの空想ではないと考える。^{*10}

このような朝鮮の状況にアイルランドの状況を重ねる言説は枚挙に暇がないが、崔載瑞らにも朝鮮文学の現状をアイルランド、およびスコットランドのそれと重ねる言及がある^{*11}。崔載瑞らの京城帝大英文科出身者たちの中にも、そのような意識は存在していたと見ることができる。

京城帝大英文科での授業内容に、そのようなアイルランド文学に対する特別な言及や、「英文学」の植民地的な意味づけが見られるというわけでは必ずしもないが——佐藤清の回想中には、京城帝大英文科での授業として Shakespeare-Milton 時代と、18世紀から19世紀の romantic movement が中心であったことが述べられている^{*12}——、しかし佐藤清が京城赴任の以前に当たる1922年にアイルランド文学に関する概観をまとめた『愛蘭文学研究』^{*13} という著書を出していることや、またイギリス留学中にアイルランド問題に深い関心を持ち1920年に「戦時中の愛蘭の叛乱と愛蘭詩人の群」(一)、(二)^{*14} を書いていることは、彼がアイルランド文学に持続的に関心を持っていた証拠として興味を引く。

この問題に関しては、京城帝大英文科の授業内容や、あるいは英文科出身者たちの文学意識や「英文学」に関する言説をもう少し綿密に検討して見た上での再検討が必要だが、少なくとも佐藤清の「英文学」に対する意識ということでは、正統的なイングランド中心の「英文学」ではなく、アイルランド文学をその範囲に含めたオルタナティブな「英文学」に開かれた意識を持っていたことが推測される。

アイルランド文学への関心の高まりは、当時国境を越えて存在していたものであり、1920年代にバーナード・ショーやイェーツがノーベル文学賞を受賞したことにより、アイルランド文学への世界的な再評価の機運は高まり、特に植民地期の朝鮮では白石、柳致真、^{ベク・ソク ユ・チジン キム・ウジン}金祐鎮らの多くを巻き込んだアイルランド文学の紹介、再評価が熱心に行われている状況があった。彼らのアイルランド文学への注目、再評価ということは、言うまでもなく植民地期朝鮮の具体的な状況に規定されたものであったと言っているが、一方ではその現象は東アジアに存在し始めていた知的、学問的ネットワークの中でのものであったことが注目される。白石、柳致真、金祐鎮らのアイルランド文学の再発見

*10 春海「海外文学消息——菊池寛氏の朝鮮文学評」(『朝鮮文壇』2、1924.10)

*11 『国民文学』での後記。

*12 佐藤清「京城帝大英文科伝統と学風」(『英語青年』、1959)

*13 佐藤清『愛蘭文学研究』(研究社、1922)

*14 佐藤清「戦時中の愛蘭の叛乱と愛蘭詩人の群」(一)、(二)、(『六合』、1920)

は、東アジアの知的、学問的ネットワークの中でなされているからである。佐藤清のアイランド文学への関心も、ある意味でそのような白石、柳致真、金祐鎮らのアイランド文学への関心と、同時代的で相互に規定し、媒介し合うものとして存在していたと見ることができる。

先に佐藤清の実践的な学風が、1930年代の朝鮮の二重言語的な条件と相互に媒介しており、その条件に規定されたものである可能性について示唆しておいたが、今見たような彼のアイランド文学への関心についても同様のことが言えるように思える。元々佐藤清にあった正統的「英文学」を踏み出したオルタナティブな「英文学」への志向が、朝鮮というトポスによって、あるいは京城帝大英文科という知的な場（トポス）によって媒介され、朝鮮の若き文学者たちの知的、文学的オルタナティブへの志向と共鳴し合ったという想像をすることができる。ただ、その間の詳しい再検討、また特に1940年代に入ってから「英文学」と「朝鮮文学」と「日本文学」とが交錯し合う時期についてはまたの検討の機会を持ちたいと思っている。